様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成２５年　６月１１日現在

機関番号：３２６３４
研究種目：基盤研究（B）
研究期間：2010　～　2012
課題番号：２２３２０００９
研究課題名（和文）　哲学的思考の特質と哲学教育のあり方
研究課題名（英文）　Essential features of Thinking Philosophically and Ways Philosophy education should be
研究代表者　大庭　健　（OBA TAKESHI）
専修大学・文学部・教授
研究者番号：００１２９９１７

研究成果の概要（和文）：時代の要請に応えようとする現代の哲学におけるアイデンティティの希薄化、主として「自然化」に向かううねりと、いわば哲学のエスノメソドロジー化に向かううねりの相乗効果として生じている。そうした中で哲学は、メタな視点からの思考を徹底し、そこから諸領域を媒介する機能を果たすべきであろう。したがって哲学的思考の育成にかんしても、訓詁学的な学説理解の偏重を改めるべきことは明らかであるが、クリティカル・シンキングに埋没せずにメタな思考をどう育てるのかはなお今後の課題である。

研究成果の概要（英文）：Identity of philosophy now gets blurred by virtue of waves produced by two distinct tides: toward philosophy “naturalized” and toward so-to-speak philosophy “ethno-methodoligized”, with the result that a remaining common task might be to advance thinking at a meta-level and to mediate among various fields. So, our current system of education of philosophy should be modified, besides amending the traditional education aimed at understanding past masterpieces, so as to develop abilities to discover problems by virtue of thinking at meta-levels without be assimilated to critical thinking in general.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2010 年度	3,000,000	900,000	3,900,000
2011 年度	5,800,000	1,740,000	7,540,000
2012 年度	2,000,000	600,000	2,600,000
年度			
年度			
総　計	10,800,000	3,240,000	14,040,000

研究分野：哲学
科研費の分科・細目：哲学、哲学・倫理学
キーワード：哲学、倫理学、自然主義（自然化）、哲学教育、子どものための哲学

１．研究開始当初の背景

(1)　哲学の自己理解のゆらぎ

倫理学での「応用倫理」の隆盛は、「看護・医療・教育の現場と哲学のコラボを目指す「臨床哲学」の生成をもキッカケにして哲学界全体に波及し、それにともなって「哲学とは何か」という自己理解の揺らぎが顕在化するようになった。

また当初は認識論において提唱された「哲学の自然化」は、心の哲学、行為の哲学へと波及し「科学と哲学」をめぐる哲学の自己理解の亀裂が露わになってきた。

こうした哲学のアイデンティティの拡散ともいうべき事態のなかで、哲学固有の思考の特質を改めて確認することが求められていた。

(2) 哲学教育の多様化と衰退の兆し

哲学のアイデンティティが揺らぎはじめているかたわらで、哲学教育もまた変化してきていた。

まず、大学では、一部では臨床哲学での実習的な教育が模索される一方、教養改革とともにかつての哲学系の科目は、諸種のディシプリンに跨ってさまざまに再編され、多様化するともに拡散する気配を見せていた。

他方、中等教育における唯一の哲学系の科目であった公民科・倫理は、開講されない高校がふえる一方、担当する専門教員の補充採用が途絶えがちで、衰退の一途をたどっていると危惧されていた。

こうした中で、高校のみならず小中学校においても国語や総合学習の時間を用いて哲学系の授業が試行的に行われはじめ、哲学の院生・ＰＤたちが多大の貢献をしている。

(3) 調査研究をふまえたメタ哲学的考察

上記の問題状況に鑑み、広義の哲学教育の実態の調査・分析を行うとともに、そうした実態をふまえたうえで、哲学的に考えるということの本質的な特徴と、そうした思考を育てる教育のあり方を模索する必要がある。

２．研究の目的

(1). 哲学の研究領域ごとの研究動向をサーベイし、そこにおける哲学の「自然化」とその特徴と問題性を、そう問題化することが伝統的な哲学観の問題性ではないかということをも含めて、精査し、もって現代において哲学的に思考することの構成的な特質を明らかにする。

(2). 哲学教育の実態について調査・分析する。①大学における教養科目・専門科目としての哲学のそれぞれについて、とりわけいわゆる臨床哲学系の教育については詳しく、各大学での教育の実態を調査する。②高校公民科・倫理の現況について調査・分析する。③「哲学カフェ」を代表とする市民教育、および小中学校でのＰＣ４（子どものための哲学）の試みについて情報を集約し検討する。

(3). 現代の問題状況に即して、科学的思考や文学的思考との連続性と種差において、哲学的な思考の特質を鮮明にし、そうした思考を育てるための基本的コンセプトを提案する。

３．研究の方法

(1) 認識論・心の哲学・行為の哲学・言語の哲学・倫理学の各領域ごとに２０世紀末葉からの研究動向をサーベイし、その領域における自然化の動向と特徴を精査するとともに、哲学全体にわたる「自然主義」を問題化した主たる論考を検討する。

(2) 各種の哲学系の教育の実情を調査する。

① 大学の哲学教育にかんしては、まず予備調査として、1. 大学の類型ごとにサンプル大学を選定し、全国で７０大学程度、カリキュラム・シラバスを収集・分析する。2. 日本倫理学会・日本哲学会などの学会に委嘱し、研究者を対象にしてアンケート調査を行う。それにもとづいて、3. 全大学を対象にアンケート調査を行う。

② 高校・公民科の倫理の開講状況・担当教員などの実態について、1. 高校の先生方からのヒアリングを行い、2.それにもとづいて全国の高校すべてを対象にアンケート調査を行う。

③ 諸種の「哲学カフェ」や「子どものための哲学」の実践をしているグループからの実践報告を収集し、共同で検討する。

４．研究成果

(1) 自然化をめぐる対立は、かつての唯物論と非唯物論の対立のように哲学内部での内紛のようにも見えるが、じつは哲学を科学に同化させることの可否という、哲学のアイデンティティに関わり、ひいては人間観の根本的改訂に関わる対立である。このことは、知覚や推論の領域での自然化にかんしてはあまり目立たないが、信念や意図の形成、是非の評価そして行為の遂行といった、より能動的な領域では、自然化の問題性が鮮明になってくる。というのも、そうした領域での自然化の遂行は、能動的な主体性、理由にもとづく選択、責任といった概念を「幻想」とみなすことを含意しうるからである。

世界的にみれば、この問題は、いわゆる「調停的自然主義」(Bishop)の可能性を一つの軸として論じられているが、物理的に描写に還元できないなら非実在だとする存在論にこそ問題の軸があるはずである。その意味で、かつて知覚的な認知に限定されて論じられていた大森の「重ね描き」論を全面的に再検討することが重要である。

(2) 他方、「臨床哲学」を典型とする、我が国の新たな哲学運動（？）は、当初は、訓詁の座学を脱した哲学教育の試みであったが、次第に、人々の暗黙の人生哲学の顕在化・言語化への奉仕にこそ、哲学の存在理由があるという主張へも発展し、哲学のアイデンティティを問い直すにいたっている。こうした主張は、一方では自己完結的な訓詁学や哲学的分析が問題を技巧的に複雑化していくこと

に対する批判的・治療的な効果を有しているが、他方では、専門的学知としての哲学のディシプリンおよび哲学研究者自身の一人称での思索の位置付けを明示的に論じることが必要であり、さもなくば極端な場合には、哲学の拡散とキャリア・パスの多様化に終わる危険なしとしない。
(3)　大学での哲学教育の実情については、哲学教育のパターンをいくつか類型化したうえで、全国約１００大学のカリキュラム・シラバスを収集し、多数の研究協力者の手を煩わせて分析を行った。しかし、時間的・人的資源の制約から、十分な解析を仕上げるまでには至らなかったので、収集したデータを伝達して、今後も何らかの仕方で継続していきたい。
(4) 高校公民科の倫理の開講状況などの実態にかんしては、高校あてのアンケート調査と公民科教員の研究組織を経由したデータの収集を行った。こちらの調査も十分な解析を完了するにはいたらなかったが、開講の状況・担当の状況ともに、事態はきわめて深刻であることが判明した。なお、これらの生データはCDの形で希望者に頒布する。
(5) 市民を対象とした「哲学カフェ」は主として大阪大学・臨床哲学関係者によって手広く展開され、この間の活動の成果と今後の課題にかんしても関係者の手によって公刊されているが、本研究では主題的に扱う余裕がなかった。
(6) それらに比べると、初中等教育において国語や総合学習などの授業をもちいて「子どものための哲学」を実践する取組にかんして、実践報告にもとづいて討議を重ねることができた。結論的には、こうした哲学的思考の訓練は、初中等教育において重要であるし、今の教育制度のもとでもある程度は可能だが、いわゆるクリティカル・シンキング一般に吸収されない実質をどう確保するのか、をめぐっては共同で考察を重ねるべきである。

以上の成果の一部は、この三年間の研究会での発表された主な原稿および討議の記録をまとめ、『科学研究費・基盤研究 B2232009 報告論集・哲学の委縮と拡散』(2013年３月、220pp.）という冊子として刊行された。当初、研究の目的としていた提言にはいまだ遠いが、関心のある方々に頒布して、今後の議論の材料として活用していただけるように努め、当初の目的に代えたい。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 15件）
① 大庭健、幸福と負い目、倫理学年報（日本倫理学会）、61 集、査読なし、2012, 5-15.
② Keiichi Noe, The Great Earthquake and Japanese View of Nature, Proceedings of the International Conference, 査読有, 2012 (1), 1-9.
③ 気多雅子、自然災害と自然の社会化、宗教研究（日本宗教学会）、査読有、373 号, 2012, 85-107.
④ 本間直樹、哲学者の実践としての探求のコミュニティ、査読有、臨床哲学、vol.5, No.10, 2012, 16-31.
⑤ 鷲田清一、多重的なものとしての身体、哲学（日本哲学会）、査読有、63 号, 2012, 25-40.
⑥ 気多雅子、仏教を思想として追求するということ、思想としての仏教（実存思想協会）、査読なし、2011, p.57-78.
⑦ 桑原直己、Unio in Persona――『神学大全』Ⅲ部第二問題、倫理学（筑波大学倫理学研究会）、査読有、27 号、2011, 1-16.
⑧ Takeshi OHBA, Self-knowledge and Moral Agency, Philosophia OSAKA, 査読有, No. 5, 2010, 1-21.
⑨ 野家啓一、哲学とは何か――科学と哲学のあいだ、日本の哲学、査読なし、11 号、p.8-22,2010.

〔学会発表〕（計 4件）
① 鷲田清一、東北の震災と「倫理学」、日本倫理学会63回大会、日本女子大、2012, 10. 14

〔図書〕（計 8件）
① 大庭健、いのちの倫理、ナカニシヤ出版、2012,252pp.
② 桑原直己、竹下政孝、山内志郎、イスラーム哲学とキリスト教中世Ⅱ、岩波書店、2012, 47-70
③ 大庭健、「Subjectをめぐる哲学的断片」、澤田治美（編）、主体性と主観性、ひつじ書房、2011, 1-24.
④ 鷲田清一、ぐずぐずの理由、角川書店、2011, 246pp.
⑤ 気多雅子、西田幾多郎『善の研究』、晃洋書房、136pp, 2011.
⑥ 本間直樹、中岡成文、ドキュメント臨床哲学、大阪大学出版会、2010, 282pp.

６．研究組織
(1)研究代表者
大庭　健（OBA　TAKESHI）
専修大学・文学部・教授
研究者番号：00129917

(2)研究分担者
新田　孝彦（NITTA　TAKAHIKO）

北海道大学・文学研究科・教授
研究者番号：00113598

野家　啓一（NOE　KEIICHI）
東北大学・文学研究科・教授
研究者番号：40103220

桑原　直己（KUWABARA　NAOKI）
筑波大学・人文社会科学研究科・教授
研究者番号：20178156

坂井　昭宏（SAKAI　AKIHIRO）
桜美林大学・人文学系・教授
研究者番号：20092059

気多　雅子（KITA　MASAKO）
京都大学・文学研究科・教授
研究者番号：20201478

本間　直樹（HONMA　NAOKI）
大阪大学・コミュニケーションデザインセンター・准教授
研究者番号：90303990

越智　貢（OCHI　MITSUGU）
広島大学・文学研究科・教授
研究者番号：00152512

(3)連携研究者
鷲田　清一（WASHIDA　SEIICHI）
大谷大学・文学部・教授
研究者番号：50121900